

地域課題

国頭村が設置した木育推進拠点「やんばる森のおもちゃ美術館」の運営の課題や、「木育」の推進、森林業の将来像などを、村内外の多様な分野の人々が共有しながら、協力しあう体制づくりのための、対話の場が求められている。

事業目的

国頭村の「やんばる森のおもちゃ美術館」を中心とする「木育」推進活動を支援する、「沖縄式」地域円卓会議の開催と、地域づくり活動の資源確保をめざす地域づくり基金の設置検討を行う。

事業概要

<取組1>国頭村の「木育」とその発信拠点の持続可能性を考える地域円卓会議の開催

地域円卓会議を3回開催することを通じた地域内外の対話の促進と館の持続可能な運営に向けた担い手の顕在化に取り組んだ。のべ22名が着席者として議論を交わし、また東京おもちゃ美術館が全国の情報提供をし、議論に参加した。

第1回テーマ: 森とともに生きる国頭村から発信する「木育」

第2回テーマ: 国頭村から発信していく「木育」をどこに届けていくか?

第3回テーマ: やんばるの森林資源を使って守るため
「木育」をどう拡げていくか?

<取組2>やんばる木育基金の設置・運営の検討

館の運営支援を含む、木育推進活動の継続をめざした、「寄付型基金」の設置検討をし、東京おもちゃ美術館の協力によるクラウドファンディングを活用した資金調達の実地体験を行った

事業成果

円卓会議の開催を通じ、地域内での関係性の「結び直し」を行い、情報発信の重要性を確認しつつ、館の運営にどのような支援が必要かについて、具体的なアイデアを共有することができた。また、円卓会議を通じて、支援ネットワーク形成の重要性を確認し、資金や人材の参加促進プラットフォームとしての機能を重視した、村内外有志による支援ネットワークが組まれた。



中間支援における工夫や苦労した点

都市型とは違う、地域の関係性の「結び直し」に力点を置いた

都市部での円卓会議のニーズは、新しいことを始めるための新しいネットワーク構築であるが、人間関係が密な小規模地域では、円卓会議を通じたその関係性の「結び直し」に期待があった。

地域内での関係性への配慮と、スピード感に寄り添うことが重要

地域に関与していくには、やはり地域のスピード感に寄り添い、地域内の人間関係のバランスにも十分な配慮が必要。そうした地域との距離感は、職人技とも言えるスタッフ個々人の経験に依るところが大きく、代替が難しい。また、外部の有効なノウハウも、押しつけでは地域が拒絶反応を起こすため、根気づよい対応と、小さなことからひとつずつ成果を積上げることが求められる。

金銭的だけでなく、人的資源をも繋ぐ必要性が高く、参加のデザイン力が求められた

震災以降、寄付に対する認識が激変したが、未だ嫌悪感・拒絶感があることは否めない。一方、地域づくり活動には人的資源も不足しがちなため、人と人を繋ぎ、巻き込んでいくことで課題解決の糸口が見える場合もある。金銭の寄付だけでなく、ボランティア＝時間の寄付を募るための参加のデザインと、それを受け入れるプラットフォームが求められていることを改めて認識した。

異なる専門性による支援の役割分担

東京おもちゃ美術館の「木育」に関する専門性と、みらいファンド沖縄の円卓会議による地域での対話促進のノウハウが、互いを補完することができた。いち団体によるものではない、複数団体による多面的な関与は、支援対象地域にとっても相談の窓口が増えることに繋がる。

今後の予定

本事業アドバイザーの東京おもちゃ美術館とやんばる森のおもちゃ美術館は、姉妹館協定を結んだことから、今後もボランティアマネジメントのノウハウ提供や、協働イベントの開催等で連携・支援を行って行く。みらいファンド沖縄も、県内での情報発信や人材の紹介、村内での対話の継続のための円卓会議やファシリテーター派遣で支援を継続する。また、期間限定での寄付募集体験を積んだ後、支援基金を村内外の有志によって設置し、ネットワーク型での館の運営や木育推進活動の支援を継続する。

平成29年末の一括交付金の終了までに、館の持続可能な運営体制が構築できることをめざして、連携・支援を継続する。

